

信頼を基盤とした教育改善プログラムの組織的展開 -生徒とともに創る潤いのある学校文化を目指して-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
福山 暁博

実習責任教員 久我 直人
実習指導教員 村川 雅弘

キーワード： 信頼 組織的 自治力

I 課題分析

1 課題設定の理由

(1) 置籍校の概要

置籍校は、昭和60年4月、市内の伝統校からの分離・独立という形で開校し、それ以来「信頼と自主行動は我らの願い」を中心価値としたニューフロンティア（新たな創造）を目指し、生徒の自主・自治活動を全面に押し出した学校づくりがされてきた。生徒数は391名、学級数は15学級、教職員数は40名の中規模校である。

(2) 置籍校の課題把握

平成27年11月に実施したアンケート（生徒、教職員）の結果と、聞き取り調査、記述式の質問から得た情報もあわせて分析し、置籍校の課題を整理した（表1）。全体的に安定した学校生活の中、埋もれている生徒の存在が読み取れた。

表1 置籍校の課題の整理

生徒が抱える教育課題	○「分からない」と言えない生徒の存在 →学級集団における他者への信頼の弱さ、主体的な学びへの取組の脆弱さ ○自分のことを大切に思っていない生徒の存在 →自分への信頼の格差
教職員の教育活動に関する課題	○教師主導の統制的な指導 →生徒が考え、アイデアを生かす場の不足 ○生徒とのコミュニケーション不足 ○教員間のギャップ、指導格差
教職員の組織上の課題	○個業性 ○同僚性の弱さ

(3) 実践研究の目的

生徒が抱える教育課題解決に向けて、効果のある指導を組織的に実践することを通して、教

育改善（生徒の変容）と教師の指導の質的改善、さらには教職員の組織化を同時に具現化することを目的とした。

(4) 実践研究の課題

- ①置籍校の教育課題の可視化
- ②組織化と教育改善を実現する教育改善プログラムの構築
- ③構築したプログラムの展開による組織化と教育改善に向けた実践
- ④プログラムの効果性の検証

2 実践研究の枠組

(1) 置籍校の課題解決に向けた具体的な方策

置籍校の生徒が抱える教育課題を解決するために久我（2014）「生徒の意識と行動の構造」に適合した効果のある指導として、①多面的な勇気づけ、②主体的な学びづくり、③規範づくり・しつけ、④生徒のエネルギーを活用した自治の4つを設定した（図1）。また、全ての方策は、多面的な勇気づけにつなげ、しっかり生徒を観るための手立てとして、設定した。

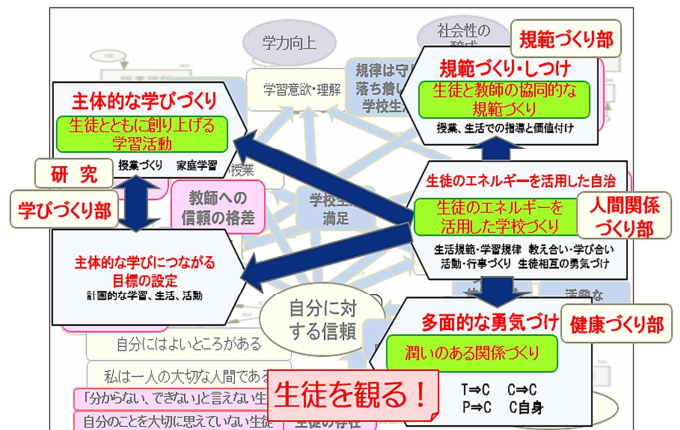


図1 教育課題改善に向けた具体的な方策

(2) 実践研究の組織マネジメントの基本的枠組み (展開イメージ)

実践研究の具体的な取組を実施するにあたり、久我 (2011)「教師の主体的統合モデル」に基づいて、展開した (図2)。

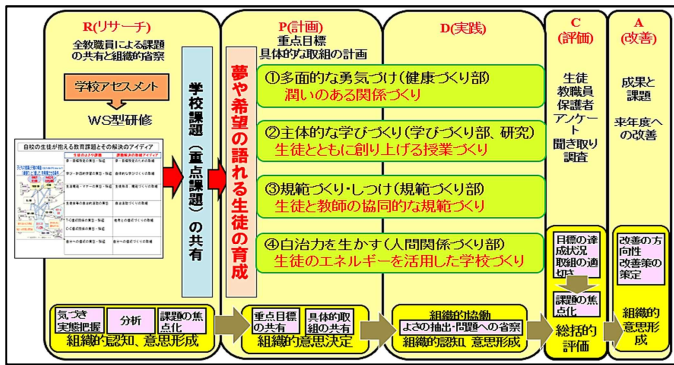


図2 実践研究の基本的枠組み

II 課題解決

1 実践研究の実施

(1) Research 期 学校課題の組織的省察

置籍校の実態把握のため、学校アセスメントを実施した。その後、校内研修にて、本学久我教授の講演 (「効果のある学校づくり」と、全教職員にアセスメント結果を報告し、共有した。さらに、組織的省察 (ワークショップ型研修) を実施し、生徒のよさと課題の抽出、効果のある指導について話し合った (図3)。安定した学校生活ではあるが、集団の中に埋もれている生徒の存在が確認され、改めて「個々を大切に観て、全ての生徒が認められる場面づくり」が置籍校の教育課題として可視化された。

	生徒のよさ	生徒の課題	解決のアイデア
学び	学習規律の定着 授業へ意欲的に取り組む	主体的な学びの不足 家庭学習の未確立	授業改善 評価
活動	活発な生徒会活動 熱心な部活動 リーダー的存在	学級内の自治力の弱さ 内化しない規範生徒の存在 支援の必要な生徒への手立て	生徒会の活用 学年学校を組織した取組 見逃さない指導 目標・夢 スタンダード
生活	規律は守り落ち着いた生活 安定した学校生活	集団の中に埋もれている生徒の存在	認められる場面の設定 勇気づけ
信頼	積極的なつながり意識 高い自己肯定感	自信が低い 家庭での愛情不足 消極的な関係づくり 他者への信頼の弱さ	

図3 生徒のよさと課題と取組アイデア

(2) Plan 期 組織的意思形成

組織的省察で捉えられた教育課題を改善するために、生徒の内面にアプローチする具体的取組を組織的に設計した。管理職、教務主任、研究主任、分掌部長による推進委員会での検討をはじめに、その後も打ち合わせを重ね具体的な取組へと練っていった (図4)。その後、運営委員会、職員会にて全体で取組の共有を図った。また、職員会では各分掌から取組が提案されるのだが、各分掌部会では、分掌部長のファシリテートのもと、綿密な話し合いが行われ、より実態に沿った取組が構築された。さらに、各取組にストーリー性を持たせ、組織としての力が分散することなく展開できることも構想した。

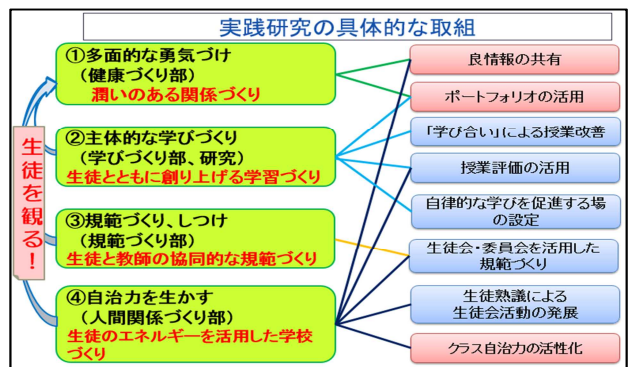


図4 実践研究の具体的な取組

(3) Do 期 課題解決に向けた組織的な実践

1) 多面的な勇気づけにおける実践

①校内研修会の実施 (2016. 4. 6)

全教職員が勇気づけを視点に生徒を観るために、これまで勇気づけをした場面を出し合うWSを行い、その後の雰囲気づくりとした。

②良情報の共有

勇気づけの実践に加え、校内ネットワーク上に日常の中で気づいた生徒の良情報を入力し、教職員間で共有するフォルダを作成した。入力を通して生徒をしっかりと観る手立てとし、個別相談等で生徒へフィードバックすることで生徒の自己価値の内面化を図った。また、生徒相互

の良情報の交換や日々の教育活動の中からも生徒の内面を勇気づける働きかけが、創発的に生まれた。従来の取組についても、改めてその理念に基づき取り組まれた。

2) 主体的な学びづくりにおける実践

①ポートフォリオの活用

自分と向き合い、自分の行動を捉え、努力を積み上げていき、成長プロセスを可視化する「紡ぎシート」を導入した。さらに、そのシートを媒介とし、相談や個に応じた具体的な支援を行い、教師が生徒一人ひとりをしっかり観ることで生徒理解を深め、信頼関係構築のツールとしても活用した（図5）。

②自律的な学びを促進するための取組

生徒の「分からない」を大切に、生徒とともに創る学習活動を目指し、学び合いを意識した授業改善を図った。学び合い研修会や授業参観週間で、互いの工夫等の情報交流を行った。また、生徒による学習態度の育成と学習法の改善を目指した取組も行い、学級の学習活動の質を高めていく手立てを自ら考え、学習の主体が自分自身であることへの気づきを促した（図6）。



図5 個別相談



図6 生徒による授業参観

3) 規範づくり・しつけにおける実践

初期指導による規範の価値が生徒一人ひとりに内在化することを目指し、教師主導だけではなく、生徒会、委員会を活用し、教師は支えながらも「生徒たちに任せる」ことで、その具現化を図った。

4) 自治力を生かす取組における実践

①生徒熟議による生徒会活動の発展

これまでの活動も含め、再度「自分たちで何をすることがどのような力につながるのか」を生徒会執行部、委員長によるワークショップにおいて熟議した。学校全体、学級の課題改善を目指し、今まで通りではなく、工夫を加えたアイデアを活かし、継続的に様々な取組が行われた（図7）。

②クラス自治力の活性化

クラスの中で「分からない」や「困った」が言える自治的集団づくりを目指し、相互尊敬や相互信頼により自分たちで学級を育てていくとともに問題解決スキルを高めるための実践としてクラス会議を導入した。毎週、金曜日の帰りの会の10分間で実施をした（図8）。



図7 生徒熟議のWS



図8 クラス会議

5) 組織化の持続・活性化を促す支援

①毎月の推進委員会の実施

毎月運営委員会の後、管理職、教務主任、研究主任、分掌部長とで推進委員会を実施した。チームとして協力や調整を含め、より広い視野で話し合いが行われ、その後の分掌部会の充実につながり、確実な取組となった。

②教職員向け通信の発行

「生徒の内面を勇気づける」働きかけにおいて促進するために、教職員向けの通信を定期的に発行した。

2 実践研究の総括

(1) 生徒の変容

本実践研究を通して、被受容感・自己肯定感、教師への信頼、生徒間の信頼、・クラス効力感といった内面についての変容とあわせて、主体的

な学び、自治力等の行動面の変容も確認できた(図9)。

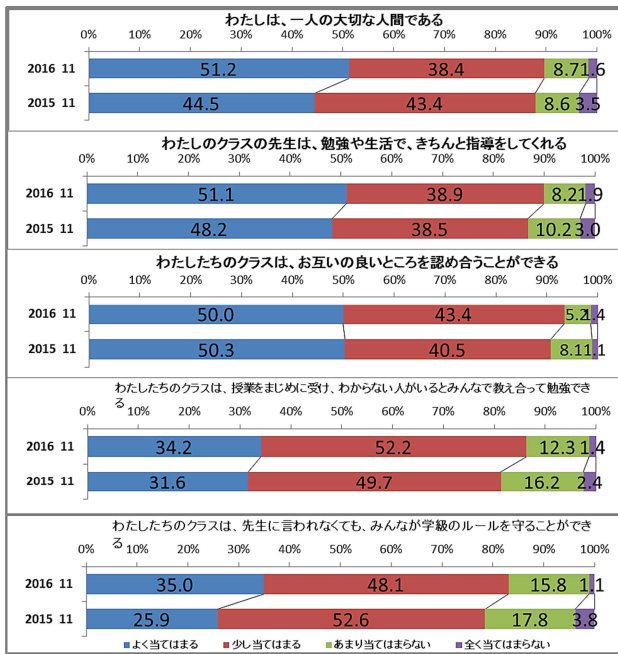


図9 生徒の変容(生徒アンケート結果より)

(2) 教職員の変容

生徒との関わりが増え、勇気づけを視点とした生徒を観る眼差しの転換と、生徒の力を活かした教育活動が促進されたことが捉えられた。さらに、生徒とともに創る学習活動を目指した授業改善も進んでおり、統制型から支援型の指導が促進されていることが確認された。また、これらの変容が組織力となり、生徒の変容を生み出したと推察される(図10)。

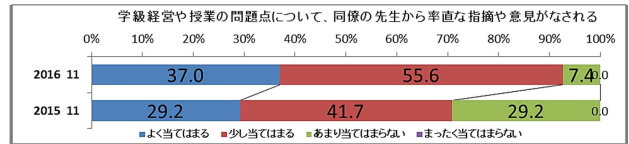
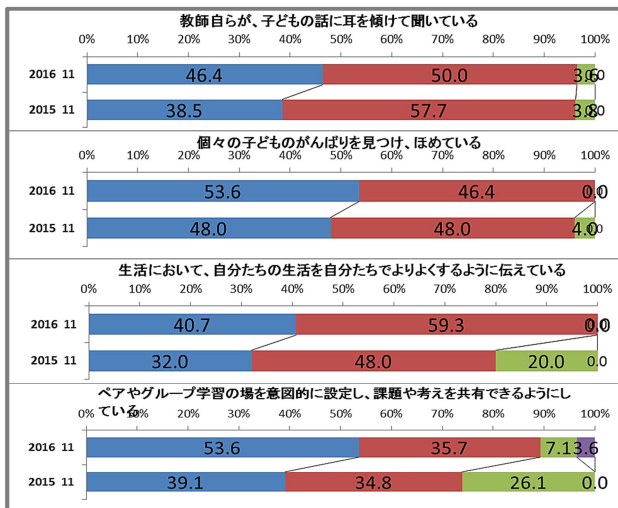


図10 教職員の変容(教職員アンケート結果より)

(3) 実践研究の成果

成果として、次の5点が挙げられる。①日常的な勇気づけ・価値づけ教育や、生徒相互の承認を促す良情報の交流が多く展開され、被受容感と自己肯定感が高まったと推察される。②紡ぎシートを導入し、自分と向き合い、それを媒介とした個に寄り添った相談と具体的な支援や、学び合いを意識した授業改善、生徒による学習法改善への取組により、自律的な学びが促進したと推察される。③教師の承認文化が生徒間においても反映され、生徒の自治的活動の発展に繋がり、教師と生徒、生徒間の信頼関係といった他者意識の向上を生み出したと推察される。④「勇気づけの視点を持って生徒をしっかり観る」ことを意識した指導が浸透し、教師の指導の質的改善が促進したと推察される。⑤組織的省察を通して、課題改善に向け各分掌組織を中心とした実践により、教職員の組織化が促進されたと推察される。以上のことから、本実践研究の目的は一定程度達成されたと捉えられる。

(4) 今後の課題と展開の可能性

依然存在する自分への信頼の低い生徒や、学習についてこられず上昇のきっかけをつかめていない生徒への支援、さらにそれらの視点に立った取組は今後も継続的に行う必要がある。また、本実践研究は、子ども達一人ひとりの本来持つ能力や優しさを十分に引き出す教育の在り方の一つのモデルを示したと捉えている。本プログラムは、どの学校においても展開可能な仕組みであり、今後汎化していくことで、教育改善が促進される可能性があるかと捉えている。